

大阪府 英語教育推進事業

デジタル英語学習ツール 活用事例報告書

令和6年度
「デジタル技術を活用した発信力強化事業」
実証研究のまとめ



令和 6 年度 大阪府 英語教育推進事業について

英語教育推進事業について

目的

大阪の子どもたちの英語学習の特質を踏まえた 4 技能 5 領域の資質・能力を総合的に向上させる

府の取組み

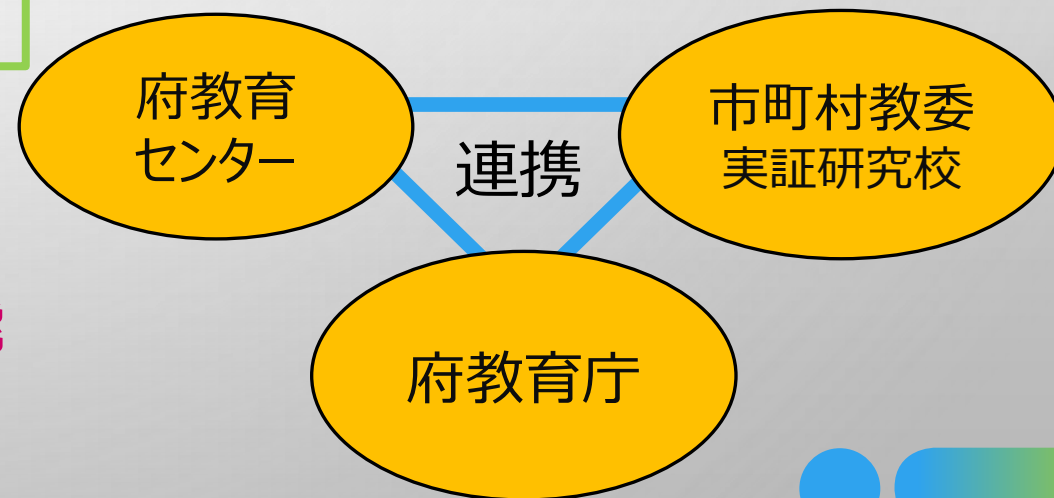
教員研修の実施（教員の英語力、指導力の向上）

発信力強化のための実証研究⇒実証研究校の指定
(デジタル技術の効果的な活用の在り方や指導改善等について)

英語教育Webフォーラムの開催

ゴール

府域の各校でICTを効果的に活用することで、英語教育における言語活動の質を高め、4技能5領域の資質・能力をバランスよく向上させて、児童生徒の発信力強化につなげる



研究を進めるにあたって

令和6年度の英語教育推進事業では、文部科学省が実施する「デジタル技術を活用した発信力強化事業」により、デジタル技術の効果的な活用の在り方や指導改善等についての研究を推進しました。

研究に活用したデジタル教材は、大阪府が事業者と開発したAIによる自動採点機能付きのWebアプリである「BASE in OSAKA」です。



英語学習ツール BASE in OSAKA

AIによる音声自動採点 いつでも発音・スピーキングの練習！

Point 1

音読した音声を発音精度や流暢さなどの観点で評価・採点を行います。

Fantastic!
85点

発音: 76 流暢度: 89 完成度: 93

A B C 未読

I usually talk about my school life with my family. I do it because my parents give me some good advice when I ask them for help. My father is good at studying, so he often tells me how to get good grades.

発音精度による色分け評価

Point 2

豊富な学習コンテンツを搭載
英検®二次試験対策では
質問に対しての自由回答を評価します。
その他 府立高校入試リスニング過去問 etc

Supermarket

Supermarket is a large store that sells different kinds of things. People can buy goods used at home, food and drinks there, so it's very convenient for people's life.



Point 3

管理画面で生徒の学習状況を一元管理

- 宿題配信機能
- 採点結果の一覧出力、生徒の音声を再生可能
- 生徒の学習履歴閲覧機能



BASE in OSAKAとは

1人ひとりの発話を評価するのが大変…

目的・場面・状況に応じて話せる力をつけさせたい

このような課題に対応するための教材が…「BASE in OSAKA」

1人1台端末やAIを活用して、個別最適な学びを実現するための「英語学習ツールのパッケージ」

子どもたちの間で英語力や英語学習に対する意欲に個人差がある…

冊子のドリルでは聞く力や話す力を身に付けるのが難しい…

- ・児童生徒が発音した、英文の音読や、英語で質問されたことに対して英語でやり取りした音声について、精度や流暢さを瞬時に判定することができる。
- ・教員が児童生徒の録音した音声やその評価について閲覧することもできる。

BASE in OSAKAについて

- ・BASE in OSAKAは、小学校向けと中学校、高校向けの2種類のアプリがあります。※希望する大阪府内公立学校において有償で使用可能。(R7.3月現在)
- ・機能面としては、児童生徒が発音した英文の音読や、英語でやり取りした音声について、AIによりその精度や流暢さを判定することができます。
- ・単語や音読の練習だけでなく、英検の面接練習や府立高校入試のリスニング問題などのコンテンツも搭載しています。

・BASE in OSAKAの 学習者用画面のトップページ



・BASE in OSAKA上で実施する パフォーマンステストの問題例



※画面は中高向けアプリ

実証研究校について

実証研究校では、「BASE in OSAKA」を活用し、児童生徒の発信力強化に向けた取り組みを進めました。

取り組み内容

小学校（3校）	摂津市立摂津小学校 大阪狭山市立西小学校 大阪狭山市立第七小学校	義務教育学校（1校）	貝塚市立二色学園 （前期課程・後期課程）
中学校（3校）	摂津市立第三中学校 藤井寺市立第三中学校 大阪狭山市立第三中学校	高等学校（3校）	府立いちりつ高等学校 府立箕面東高等学校 府立四條畷高等学校

<実証研究校における、AI搭載のデジタル教材【BASE in OSAKA】の活用における分析・検証>

- BASE in OSAKAを活用した1回10分程度のスピーキングやリーディング等の英語力を測るパフォーマンステストを実施し、英語力の変化を見とる。（年間3回実施）
- 「児童生徒の関心・意欲」、「教員の指導や評価」の検証に関するアンケート結果から、児童生徒の情意面や教員の意識の変化と、児童生徒の英語力及び活用状況等の相関関係について分析する。
- 児童生徒が教員やALTとの実際のコミュニケーションを行う、対人でのパフォーマンステストを実施する前に、BASE in OSAKAを活用してコミュニケーションを行う練習に取り組む。
- 各実証研究校において、授業や家庭学習においてBASE in OSAKAを活用し、効果的な活用の在り方や指導改善等について実践を通して研究する。

The background is a light gray gradient. It is decorated with numerous realistic water droplets of various sizes, some with highlights and shadows, scattered across the surface. In the upper center, there is a faint, circular logo or seal, possibly a university crest, which is semi-transparent and blends into the background.

実証研究校における活用事例

1. 「BASE in OSAKA」の活用について

○授業では、導入等で表現の確認を行い、児童が自ら学習課題に気づけるように取り組んでいる。また、ペアトークや会話練習の前に、表現や単語の発音練習を行い、自信をもって取り組めるように留意している。

○家庭学習では、授業で学んだ単語の復習や既習内容の定着のために関連する単語を練習させている。また、自主学習で積極的に使っている児童も多く600ポイント以上※集めている児童もいる。

※BASE in OSAKAは、問題に取り組んだ回数等に応じて、スコアが増えていく仕組みになっている。

12. 本時の展開			
(1) 本時の目標 道案内の言い方を知り、友達に簡単な道案内をする。			
(2) 本時の学習過程			
時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準 (評価方法)
導入	Greeting (気分、天気、曜日、日付) 指導者とALTのsmall Talkを聞く。	単元を通して学ぶことを児童に気づかせる。	
展開	Unit Goal クリス先生に地域のおすすめの名所を紹介しよう。 Today's Goal 友だちに道案内をしよう。 Let's watch アニメーションを見て、道案内の時に使う表現や必要な単語に気づけるよう留意する。 Keyword check ① ALTと一緒に表現を確認。 ② 「クイズ」ゲームを行う。 ③ BASE in OSAKAで確認(表現③) 友だちに道案内(口頭・ノート)	アニメーションを見て、道案内の時に使う表現や必要な単語に気づけるよう留意する。 「go straight, turn right, turn left」の3つの表現を用いて、ゲームを行い表現することで、道案内の表現に慣れさせる。 道案内をするために、必要な表現の確認をし、BASE in OSAKAで自己調整するよう促す。 ALTと指導者がロイノートを使って道案内する例を見せることで、児童を持ちやすくする。 友だちに道案内をすることで、何が難しいのか、何を練習するのかわかるようにさせる。	
総括	Review ALTと復習	難しかった表現やこれから練習のたいことを振り返り記入するよう促す。 ALTと今後頑張っていくことを確認する。	

▲Where is the library? (5年生)

点線:授業でBASE in OSAKAを活用した箇所

2 発信力強化に向けて

○摂津市では、「言語活動の充実・発信力強化」を目標とし、BASE in OSAKAやCETアカデミックプログラムの留学生との交流を行ってきた。

英語が得意に関わらず、自信をもつことができない児童が多くいたが、BASE in OSAKAを活用し何度も練習に励んだり、教員やALTからのフィードバックを生かしながら復習したりすることを通して、少しずつ自信を持って取り組めるようになってきた。

また、「全体では聞き取ることができなかったけれど、BASE in OSAKAでは何回も聞くことができる」という意見が、多くの子どもたちから上がっていた。

○学校の教職員に、実際にBASE in OSAKAを使用してもらい、使い方の共有や効果的な活用場面について意見交換する機会を設けた。また、市主催の連絡会や他の実証研究校への視察の際に、BASE in OSAKAの活用方法についての共有及び検討を行った。



▲BASE in OSAKAに取り組んでいる児童の様子
(一人ずつヘッドセットを用いて発話練習に取り組んでいる。)

3. 成果・課題と今後の展望

○成果

子どもたちの学力差を埋めたり、AI評価を参考にすることで、成績をつけやすくなったりするという点において、高い効果があった。また、AIがすぐにフィードバックしてくれ、個々の課題に応じた練習ができるため、自分の苦手な部分を子どもたち自身が把握しやすくなり、活動への意欲を高めることができた。

教員の指導については、教員用の管理画面から、児童の録音音声や学習状況を把握することができ、児童の学習意欲の高まりがよく分かるようになった。特に、一人ひとりの発音を授業時間以外にも確認できるため、子どものつまずきに気づきやすくなった。

○課題・今後の展望

家庭学習での活用に課題がある。授業で学んだことだけでなく、パフォーマンステストに向けた練習等、今後は子どもたちが家庭学習で使いたいと思うしかけを考えていきたい。

BASE in OSAKAを活用することで、発話練習や会話練習の機会を多く設定することができた。今後は、実際に英語を使ってコミュニケーションを図る取り組み等に結びつけて、発信力の強化につなげていきたい。また、臨機応変に対応できる力を身につけさせるために、どのように活用していくべきか、今後も引き続き検討していきたい。

1. BASE in OSAKAの活用について

○今年度初めてBASE in OSAKAに出会い、興味津々で使い始めた1学期。まず慣れること、日常的に聞き音声を聞いてまねてみることに楽しく取り組んだ。児童の反応は大変よく、何度も聞き返したり、AIからのフィードバックの点数や評価を上げるべく努力したりする姿がみられた。

毎日タブレットを持ち帰っており、自宅で開いてやってみる習慣をつけるよう、聞く箇所を示した。ポイントの加算が励みとなるよう促し、活用の頻度を上げるべく取り組んだ。

○2学期以降はツールに慣れ、取組みがスムーズになる一方、少しずつ飽きが出て失速している様子も見受けられた。取組みをしっかりと認め、ほめることを意識して積極的に取り組んでいる児童を表彰することなども試みた。

○授業内では、個々で取り組む時間を冒頭に設定した。また、言語活動に先立ち、表現を確認し練習することで自信をもって発話できるよう、わからないことを調べたり確認したりするツールとして活用した。宿題として配信することで英語の音声を聞く量を家庭でも確保できるよう心掛けた。

2. デジタル学習ツール活用の効果

○英語の音声を聞くこと、まねて言うことが当たり前前の活動となり、これまでと比較して英語に触れる量が圧倒的に多くなった。

聞く力が大きく発達する学齢期の児童に、良質な音声を繰り返し聞かせることのできるツールの意義は大きい。現時点では見えていない効果が、のちになって現れることも期待される。

○さまざまなレベルの児童に向けたコンテンツがあったことも、個々の取組みを支援することにつながり有意義であった。普段の授業では物足りなく感じている児童も、英検チャレンジなど、発展的な内容に生き生きと取り組む姿が見られた。



▲授業内での活用の様子

3. その他のデジタル教材の活用について

○オクリンクやGoogle スライドを活用し、音声や発表の様子を録画したものを提出させた。これまで、特に高学年の児童の中には、教室の前に立つて話すことへの抵抗が英語で発話することの妨げになることもあったが、デジタル教材の活用により心理的なハードルを下げる効果があった。

○教科書の例をなぞるにとどまらず、実際に自分が興味のある物事や、友だちに紹介したい物事を取り上げることが可能にし、言いたい気持ちを掻き立てることで、児童のモチベーションをあげることができた。

○「町紹介」の単元で、横浜市の公立小学校とビデオ交換を行った。児童が生き生きとして活動できたことは、デジタルツールなくしてはできなかった学習である。



4. 成果・課題と今後の展望

○ツールの活用により、日常的に英語に触れることができ、外国語の学びに必須となる音声のインプットやアウトプットが身近になることで、英語学習に取り組む環境が整ったことが大きな成果であった。

○デジタルツールを活用する前段階の外国語活動において、高学年での学びを意識しながら授業づくりをし、音声に慣れ親しむことがより重要になると考えられる。

○AI等を活用する際に、学習の初期段階の物めずらしさや、表彰される喜びを超えて、児童が意欲的な学びを継続できるよう指導を工夫していく必要がある。

何のためにデジタルツールを使うのか、その目的を明らかにすること、やればやるだけ自分のためになり、楽しくなるという語学学習の醍醐味を味わえるようにするにはどうすべきかということを中心に検討していくことが、今後の指導の課題である。

◀BASE in OSAKAを使った練習に、積極的に取り組んでいる児童を表彰

1. BASE in OSAKAの活用について (活用の方法や場面など)

○授業での活用

反復練習としての授業実践 A

単語・表現を調べるツールとしての授業実践 B

○家庭学習での活用

夏休み・冬休みに週1回10分程度のBASE in OSAKAの課題を配信し、継続的に英語に触れる機会を作った。

○隙間時間での活用

他の児童がパフォーマンス課題を受けている際の待ち時間等に自主学習として取り組んだ。

(児童の変化 教員の指導の変化)

○児童の様子

導入当初は利用率も高く、反復練習として休み時間に活用している児童の姿があった。2学期以降、ツールに対する慣れから、使用回数の減少がみられ、達成ポイントで称号を与えるなど工夫を行った。

AIからの即時フィードバック機能が、児童にとってわかりやすく、学習到達度が明確になった。

○教員の指導の変化

パフォーマンス課題に向けての学習調整ツールとして、課題を児童に提供できるようになった。

2. 授業実践 A

～地域と連携したパフォーマンス課題の設定～
R5 大阪狭山のええとこをプレゼンしよう

本校は令和5年度より、コミュニティ・スクールとして地域と学校で児童の学びをサポートしている。6年生の外国語科で、地域との連携を模索したところ、校区内にある公民館の「てとてとクラブ」さん（日本語教室）を紹介いただいた。そこで、3名の市内在住の外国人の方を学校に招いて、6年生が「大阪狭山市のええとこ」を英語でプレゼンする機会をいただいた。

児童は、一人ひとり地域の魅力を調べ、ICTを活用しながら、習った英語を使ってプレゼンすることができた。また、発表内容のキーセンテンスについて、BASE in OSAKAを活用して反復練習する姿が見られた。

活動前後の児童アンケートの結果では、「外国人の方とコミュニケーションをとってみたい」と肯定的に答える児童の割合が70%(1学期)から80%(3学期)に増加した。

実際に、外国人の方とやりとりしたり、英語で発表したりすることで、英語を学習する目的・場面・状況が明確になり、児童の学ぶ意欲の向上につながった。



▲この児童は、地域にお住まいの外国人の方へ狭山池の魅力をプレゼンしています。

3. 授業実践 B

～地域と連携したパフォーマンス課題の設定～
R6 ホンダ学園の留学生と交流

令和6年度は、5年生で外国語科×社会科で、本校の隣にあるホンダ学園（自動車整備を学ぶ専門学校）の留学生との交流を行った。

ホンダ学園には約100名の留学生が在籍している。児童は通学の途中で出会うが、あいさつや話をしたことがないとのことだった。

5年生は、1月にホンダ学園の見学に行くことになっていたため、10月に事前学習として、「留学生に身に着けてもらう名札作りをする」という設定で、留学生との交流を行った。児童は名札を作るために、実際に留学生に対して、好きなものや特技などを英語で質問し、やりとりをすることができた。

その過程で、どのようなことを質問したらよいか、BASE in OSAKAにある【表現】のコンテンツを参考にしながら、質問を考える活動に取り組み、実際の留学生とのやりとりに取り入れることができた。

12月に社会科で自動車の学習をしたのち、1月にホンダ学園の整備工場見学をすることで、英語だけの交流で終わらず、教科横断的に学びを深めることができた。

この学習後、児童は留学生の方と顔なじみになり、「このあいだ金剛駅で〇〇さんに会ってあいさつしたて」と話すなど、地域の方とのつながりの輪を広げることができた。



▲名札を受けとって頂いた時です。

4. 成果と課題 今後の展望

○成果



パフォーマンス課題の練習を、今までは友だちか教員に聞いてもらうしかなかったが、AIと練習して即時フィードバックがもらえるので、児童の練習回数が増えた。また、AIからの評価により、児童の学習到達度が明確になった。

教室では英語を発するのが苦手な児童が、自宅で保護者と一緒にBASE in OSAKAに熱心に取り組んでいたり、学習が苦手な児童がポイントを得るために毎日取り組んだりしている姿が見られた。

○課題

一部の児童だけでなく、学級全体でBASE in OSAKAを自主的に活用するような場面・課題の設定が指導者に求められてくる。

○今後の展望

前述の2.3の実践で、児童が地域の外国人の方とつながりを持つ機会を作れたが、英語でやりとりすることだけでなく、人より良く関わる態度の育成も同時に行えるような指導をさらに充実させたい。

また、BASE in OSAKAをもっと自主的に活用するような場面・課題を設定し、学校×家庭学習の連携についても、引き続き検討していきたい。



Good job!

大阪狭山市
マスコットキャラクター
「さやりん」

1. BASE in OSAKAの位置づけ

○授業内

- ・生徒自身が、複数ある英文をネイティブスピーカーの音声で聞いたり、英語で話したりすることを繰り返す過程において、文の意味や語順、使用場面を想像するなど個々の『学び』を重視するため、主に導入部分の帯活動で活用した。

○家庭学習

- ・長期休業中において継続的に聞く・話す・読む学習ができるよう、1週間の期間限定で、課題を毎週配信した。また、BASE in OSAKAは高校入試や英検の模擬面接の問題を含め、多種多様な教材が充実しているため、自主勉強として活用を進めた。



▲夏休みの毎週月曜日、1週間の回答期間を設け、宿題を配信した。

2. 言語活動の充実と発信力強化

○言語活動の充実

- ・BASE in OSAKAの基本練習の例文を自分事に置き換え、友達やALTとの即興性を要するスピーキング活動につなぐ一連の流れを確立した。

○発信力強化

- ・オーストラリアの生徒とオンライン授業を実施した(第1学年)。また、CETアカデミックプログラムの留学生との交流会において、日本の学校や文化、慣習について英語による発表やフリートーク等の活動を行った(第2学年)。どちらの学年も英語でのコミュニケーションを行う際には、相手意識をもち、コミュニケーションを図ろうとしていた。



▲CETアカデミックプログラム留学生との交流の様子

3. 成果と課題

○成果

- ・各生徒が自分のペースで課題に取り組むことができるため、自由進度学習を効果的に進めることができると同時に、支援を要する生徒への細やかな学習支援ができた。
- ・AIにより数値化されたフィードバックや発音指導を瞬時に得られるため、生徒がより良い発話をめざして何度もチャレンジし続ける姿が見られた。

○課題

- ・活用が進むにつれて、一部の生徒にBASE in OSAKAの使用に飽きが生じてくる様子が見られ、解消するための工夫や教員のしつけが必要である。

4. まとめと提案

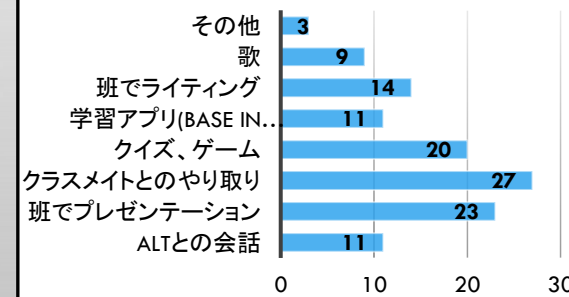
○自由進度学習

- ・生徒が自身の課題に応じた問題を自分のペースで取り組むことができるため、BASE in OSAKAは効果的である。一方で、「飽き」が生じるため、その都度、目的やタスクを明確にすることが重要である。今後は、教室内外の言語活動につながることを生徒が実感できるような工夫を行いたい。

○英語授業アンケート(第1学年)

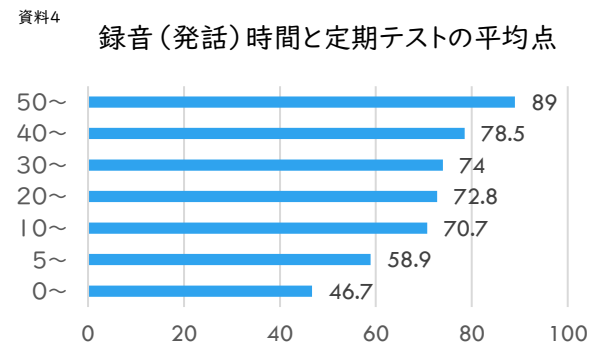
- ・生徒たちは友達やALTとの会話において、校区の小学生及び海外の生徒に向けてのプレゼンテーション、その前後のやり取り等、リアルな場面において英語学習の面白さを感じているとわかった。今後も、学んだ英語を発信することができる交流の場をさらに増やしたい。(アンケート結果参照)

英語を楽しく学べる活動



◀ 英語授業アンケート(第1学年)
「英語を楽しく学べる活動(力がついていると実感できた授業内の活動 記述式)」の回答結果

3. 今後に向けて



1. BASE in OSAKAの活用について

○授業冒頭で、ウォーミングアップとして基本練習（音読）を利用。
授業の内容と関連した項目を提示し5分～10分取り組んでいる。

○長期休業中の宿題として、基本練習からいくつかの項目（既習の文法事項）を出題している。

○英検受験者は、スピーキングテストなどを利用している。

【活用を通じた生徒・教員の指導の変化】

○生徒の変化

英文を読む際には、音と音のつながりを意識するようになったり、アルファベットの 一音にもこだわる様子が伺えた。

○教員の指導の変化

家庭学習の一つの選択肢として生徒に提示した。授業の中では、発音に対するフィードバックを一定AIに任せることで、コミュニケーションの時間をより多く取れるようになった。

2. 小中のつながりを意識した取組み

①大阪狭山市英語プレゼンテーション大会

「自分の思いや考えを表現できる生徒を育てる」ことを目標とし、市内の小・中・高から出場者を募集した。

第2回となる今年度は、夏休み期間中に、中学校教員とALTがそれぞれの校区内の小学生のプレゼンを指導した。

来年度は小中合同練習を実施し、大会前に子どもたち同士の交流ができるよう取組みを進めたい。

また、この大会の実施に向けて、中学校では、生徒が意見交流できる機会を積極的に設けるよう心掛けて指導にあたった。

②即興性を磨く帯学習

小学校では、一問一答形式でコミュニケーションを取る会話練習を帯学習で行っており、中学校ではそれらに加えて、「一文を追加して答える→一定の時間、提示されたトピックについて自由に話す」というようにスモールステップを意識して、即興性を磨く活動を帯学習として続けている。

③ジョリーフォニックスの導入

スローラーナーの生徒が英語学習に取り組む際に、「単語が読めない」ことに対してストレスを抱えていることが多いということが、校内の英語科教員の実感として挙がったことがきっかけで、ジョリーフォニックスを導入することになった。

夏に講師の方を招いて研修を行い、校内でも実践交流をしている。

今後、小学校からの導入もめざし、小学校市教研でも研修を重ねている。

3. 来年度に向けて

①BASE in OSAKAについて

授業以外の場面においても、学び方の選択肢の一つになるように、1年時にはある程度帯活動でBASE in OSAKAを利用し、様々な活用方法を提案することで、子どもたち自身にその成果を感じてもらいたい。

②小中のつながりを意識した取組みに関して ・プレゼンテーション大会

市教研でルーブリックを検討する。
ルーブリックについて議論することで、市内の中学校における英語によるプレゼンテーションの指導の指標となり、教員が研究を深めることができる。

・ジョリーフォニックスについて

今年度は中学校1年生で導入した。1年間の成果として、アルファベットの読みに関するテストや生徒へのアンケートを実施し、今後の指導に活かすため、生徒たちがどの程度「読めるようになった!」と実感することができているのか検証していきたい。



▲BASE in OSAKAのAIによるフィードバックの画面

1. 「BASE in OSAKA」を含むデジタルツールの活用について

本校は、1年生から9年生までの義務教育学校として、前期課程（小学校）・後期課程（中学校）の連携を大切にしながら、教育にデジタルツールを積極的に活用している。特に、「BASE in OSAKA」「Padlet」「生成AI」を有効に活用することで、児童生徒の学びを深めるとともに、主体的な学習態度を育むことができた。

①BASE in OSAKAの活用について

授業で学んだ知識や技能を定着させるために、振り返りや復習の場面でBASE in OSAKAを取り入れた。具体的には、教員から指定した問題に取り組む場面と、児童生徒が自分の苦手分野を選んで挑戦できる場面を設け、学習をより個別化した。これにより、児童生徒は自分のペースで繰り返し問題に取り組む、主体的にやり直す姿勢が育成されたと感じる。特に、何度も繰り返すことができる点が、児童生徒一人ひとりの理解を深めることに効果的であった。

②Padletの活用について

ライティングの機会を増やすために、授業の中でPadletを活用した。Padletは、教員がアカウントを作成し、生徒がリンクをクリックするだけで簡単にライティングに取り組むことができるため、非常に便利なツールである。この機能を使って、オンライン交流を行っている台湾・台中市の中学生にリンクを送り、デジタルツール上でコメントを交換し合う活動を行うこともできた。これにより、生徒は実際の言語使用の場面を体験し、より実践的なライティング力を身につけることができた。

③生成AIの活用について

本校では、貝塚市教育委員会の協力を得て、生徒にメディアリテラシーの授業を実施した後、生成AIをライティングのサポートツールとして活用した。生徒たちは、生成AIを使って自分の文章を添削したり、アイデアを広げたりすることができ、ライティング力の向上を実感している。このようなデジタルツールを活用することで、英語学習における自信を深め、生徒が主体的に学びを進める力が育成されている。

これらのツールを児童生徒の発達段階や学習段階に応じて活用することで、児童生徒の英語力向上に大きく寄与していると感じる。デジタル技術を教育に取り入れることは、今後さらに重要な要素となると考えられる。

2. 9年間を見通した一貫した英語教育

9年間の一貫した英語教育を進めていくために、本校で行っている取組みを以下に紹介する。

①授業内だけでなく、授業外でも英語を

授業外でも英語を使いたくなるような仕掛けとして、週に1回「Nishiki English Day」として、水曜日のお昼休みに、English Roomで英語を使ったゲームや絵本の読み聞かせ、ALTとの英会話の時間を設けている（参加は自由）。また、毎週木曜日の昼食時には、放送委員会の生徒が、英語でDJを行い、子どもたちが普段から英語に触れる機会を設けている。

また、児童生徒が興味のある内容について「英語で読む機会」を増やすために、英語教室内に多読コーナーを設けている。児童生徒は、教室内外で英語の本を自由に読むことができる。

②「指導法・教材・内容」の共有

前期課程英語専科と、後期課程英語科の教員で、「指導法・教材・内容」の共有を日頃から行っている。一貫した英語教育を行うことで、単に言語能力を育成するだけでなく、異文化理解やコミュニケーション能力を高めることができると感じる。教室内には、一貫した英語教育の中で、「何ができるようになってほしいか」を明確に共有するために、大阪府教育庁が作成している、大阪版CAN-DOリストを掲示し、児童生徒がいつでも自分の今の段階を確認することができるようにしている。

③目的・場面・状況を設定した言語活動

前期課程・後期課程ともに、目的・場面・状況を設定した言語活動の設定を、単元の中で複数回設定し、授業を行っている。例えば、前期課程では台湾の台中市にある小学校と、後期課程では台湾の台中市にある中学校と、オンライン交流やビデオ交換などを通して、アウトプットの相手（目的）が誰なのかを明確に設定するようにしている。このことで、生徒の使う英語の言語面や内容面に、より変容が見られる。

④1年生から9年生まで系統立てた英語学習

本校では、1年生からフォニックス学習を週1回行っており、系統立てた英語学習を行っている。また、毎月1回英語活動を取り入れ、身の周りのものの名前など、ゲーム活動を通して英語に慣れ親しみ、英語を通して他者と関わり合う楽しさを体験的に学ぶ機会を作っている。

毎週行うNishiki English Dayでは、1年生から9年生だけでなく、全教職員が、日常生活でも英語を活用することは抵抗感を減らし、英語で繋がる取組を実施している。



3. これまでの課題と今後の展望

義務教育学校という特徴を活かして、前期課程と後期課程の児童生徒が積極的に交流できるような、英語を使った学びの場をさらに増やしていくことが課題である。今後考えている計画として、例えば、後期課程の生徒が前期課程の児童に英語で絵本を読み聞かせるなど、学年を超えて交流しながら学び合う機会を提供していきたい。このような活動を通じて、前期課程の児童にとって、後期課程の生徒が「ロールモデル」としての役割を果たし、英語を使ったコミュニケーションに自信を持てるようになることをめざしていきたい。

さらに、本校の教育目標である「自分で考え、仲間と協力しながら学びを深めていく」児童生徒を育成するために、教員が「伴走者」としてサポートし、言語活動の充実や発問の工夫を行う。前期課程と後期課程の教員が連携を深め、どちらの課程でも児童生徒の力を引き出せるような授業づくりを進めていく。

また、国際交流だけでなく、国内の他校との交流も増やし、子どもたちが多様な文化や価値観に触れる機会を提供し、学びの幅を広げていきたい。これにより、子どもたちが地域社会や国際社会で必要とされるスキルを身につけるとともに、多様性を尊重する態度をより一層育んでいきたい。



▲前期課程の1,2年生がNishiki English Dayで、ALTの先生から英語の絵本の朗読を聞いている様子

←台中市の中学生たちと、1人1台端末でオンライン交流を行っている様子



▲9年間の一貫した英語教育を進めるために、教室内に「大阪版CAN-DOリスト」を掲示

1. 「BASE in OSAKA」の活用について

○授業の冒頭5分～10分間程度、BASE in OSAKAの「基本練習」・「英検」などの機能を活用し、4技能をバランスよく学習した。

○BASE in OSAKAの「英検（スピーキング）」を活用し、与えられたテーマについて自分の意見を複数の英文で述べる練習に取り組んだ。

○入試対策として、BASE in OSAKAの「基本練習（並び替え）」を活用した。

○英語資格・検定試験の面接練習を希望する生徒は、BASE in OSAKAの「英検」の模擬面接の機能を活用した。

○パフォーマンステスト（ディスカッション）を行う直前に、BASE in OSAKAの「英検」を活用し、発話練習をした。

2. デジタル学習ツール活用の効果

○「英検（スピーキング）」を活用することで、生徒はAIによる評価（点数）フィードバックを瞬時に確認でき、意欲的に取り組んでいた。

○特に英文並び替え問題は入試においてよく出題される形式であるため、家庭学習の中で「基本練習（並び替え）」を活用している生徒も多くいた。

○英語資格・検定試験の面接指導のみならず、筆記試験の指導を行う際にもBASE in OSAKAを活用するようになった。

○BASE in OSAKAの「英検（スピーキング）」を日常的に活用することで、積極的に英語を話す姿勢が育った。

3. 成果・課題と今後の展望

○2学期以降、授業の冒頭5分～10分間程度、BASE in OSAKAを活用してきたため、活用にも慣れ、家庭学習等においてもBASE in OSAKAを積極的に活用する生徒もでてきた。

○授業の中で、BASE in OSAKAを活用する際、当初は、一斉に同じ課題に取り組ませていたが、現在は、それぞれの習熟度に合った課題に取り組むよう指導している。取り組んでいる課題が生徒によって異なるため、生徒へのフィードバックについては、AIに任せている部分が多く、個々の生徒に対する教員からのフィードバックをどのように充実させていくかが今後の課題である。



◀ 活動中の様子

大阪府立箕面東高等学校

1. 「できた」を見出す英語教育

本校は、基礎からの学び直しに取り組みたい生徒や中学校の学習でつまづきを感じていた生徒、あるいは勉強に苦手意識を持つ生徒などが多く在籍する、エンパワメントスクールである。特に英語教育においては、「自分でもできた」「成し遂げた」という感覚を学習の中で体験することが重要だと考える。この理念のもと、英検取得を目標とする学習を進めている。

【具体的な取り組み】

・授業最初の15分でWarm-Up、パフォーマンステスト

英語の授業に入る前の準備運動として、BASE in OSAKAの「英検」「STEPS in OSAKA」に取り組ませた。個人の進捗に応じた自主的な学習をサポートし、「Fantastic!」※を取ることを目標とした。これにより、英検受験へのモチベーション向上やスピーキングへの抵抗感を減らすことに焦点をあてた。BASE in OSAKAでの練習内容を、ALTとのパフォーマンステストに発展させることも行った。昨年に比べ「話す活動」に抵抗なく取り組んでいる様子が見られる。 ※AIからの評価の一つ

・個別指導と柔軟な対応

放課後の勉強会を希望者に提供し、教員1名に対し生徒3名という少人数制で個別指導を実施。生徒のペースに合わせて英検4級から2級まで幅広く対応。

・成果の拡大

2015年から2019年まで英検の受験者数は全校で3～4名程度であったが、2023年度にBASE in OSAKAを試験的に導入してから受験者数が飛躍的に増加。2024年第3回では17名が受験し、大学進学(公募推薦)を果たした生徒もいた。

・動機付け

BASE in OSAKAの「英検」に挑戦することで、自分の受験級のめやすを知り、学習へのモチベーションを高めている。

●外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、日常的な話題から時事問題や社会問題まで幅広い話題について、情報や考えなどを外国語で的確に理解したり適切に伝え合ったりするコミュニケーション力を身に付けている

●大阪版CAN-DOリストにおける「STEP4」(A1.3) かつ「英検3級程度」の英語力の習得

2. 「ホンモノ」に触れる国際教育

本校では、国際交流活動を通じて生徒たちに「ホンモノ」の国際的な体験を提供し、英語学習への興味と実践力を育む取り組みを行っている。

【具体的な取り組み】

・韓国をはじめとしたアジア各地の生徒とのオンライン交流

英語や韓国語を用いて、現地の高校生とのオンラインで意見交換を行い、言語運用能力と異文化理解を高めている。

・ストリートインタビュー

京都や大阪城で、外国人観光客を対象とした英語でのインタビュー活動を実践。生徒たちは「Excuse me? Interview OK?」といったフレーズを自然につかえるようになり、翻訳アプリやメモを活用するスキルも習得。

・スタディツアーin韓国

現地の高校生との交流を含む海外研修を実施し、生徒たちに異文化体験を提供。冬休みには、生徒が自ら旅行計画を立て、韓国を訪れるなど、草の根レベルの交流が広がった。

【効果と意義】

BASE in OSAKAを導入したことにより、設定された場面で英語を即興的に使う練習として、多いに活用できる。

受験英語にとらわれない実践的なスキルを提供し、生徒の自己成長を促すとともに、国際的な視野を広げる契機となっている。



3. BASE in OSAKAの取り組みから見える「今後の展開」

BASE in OSAKAの活用により、英検受験者数が増え、スピーキングに重点を置いた学習の重要性を生徒たちが実感する結果となった。

【課題と改善点】

・スピーキング活動の早期導入

英語を話すことに抵抗がある生徒が多いため、高校入学時からのBASE in OSAKAの使用開始がより効果的であると感じる。初期に「英語は使うものだ」という気持ちをインプットすることで、3年間の英語学習の目的や結果により大きな影響を与える。

・目的意識の形成

英検や国際交流活動を通じて「自分の言いたいことを伝える」という目的意識を生徒に持たせる取り組みを強化する。

【将来の展望】

今後は、BASE in OSAKAを通じて、スピーキング活動への取り組みをより一層推進し、全校生徒が英語を実践的に使用する機会を増やす方針である。また、学習意欲が高くない生徒に対しても、成功体験を提供することで、英語学習への興味を引き出す取り組みを進めていきたい。



◀ 活動中の様子

1. BASE in OSAKA の活用場面について

英語学習において、「音読」の必要性を授業では伝えてきた。特に、高校1年生にとって、その習慣をつけることが重要になってくる。しかし、家庭学習における「音読」の必要性を感じる、それを習慣化することを、全生徒に意識づけることは難しいと感じてきた。

そこで、BASE in OSAKAを「音読」と「スピーキング」に焦点をあてて、活用した。

<活用場面>

① 夏季休業課題での活用

文章音読(Reading) 20セットを宿題として配信。
1日1つの音読を目標とした。

② 英検受験者だけでなく、スピーキングの活用を促した。 (個々の目的に応じた活動の紹介)

③ パフォーマンステスト年3回。1学期・2学期・3学期と、定期的にスピーキングテストを実施。 年間の最後には、各自のスピーキング力について、生徒が振り返りを提出。

2. 生徒の様子の変化と成果

「音読」の課題に取り組んだことにより、夏季休業後の生徒の意識に変化が感じられたように思う。振り返りにおいても、「音読」の必要性を痛感した生徒が多く見られた。音読のフィードバックがAIからすぐに得られることで、生徒の意欲・気付きにつながったとを感じる。

BASE in OSAKAを活用したパフォーマンステストにおいては、AIによる「発音採点結果」等が詳しく出るため、前回テストの振り返りをしながら、次につなげている生徒もいた。10月に実施した2回目よりも、1月に実施した3回目における、生徒の「音読」の内容は向上が見られた。

3. 課題と今後の展望

BASE in OSAKAの機能として、音読教材が「Normal」のみであったため、より発展的な内容など、幅広い難易度の問題が選択できればより良い指導につながったと感じる。また、授業の内容につながるジャンルでの音読が選択できるとより効果があったと感じる。

また、Reading→言い換え表現などのコンテンツがあれば、より良く活用できたと感じる。

全体を振り返って、生徒の学習状況に応じた、継続した指導につながる活用方法を見出す必要があった。

2025年1月
79期1年英語科

Base in Osakaについて(2025年1月)

これまで、第1回を7月に、第2回を10月に、スピーキングテストを受験しました。1年の締めくくりとなる第3回の受験を実施します。最後は、みなさんの自宅環境を整えて受験してください。よいみなさんの最大限となります。1高校1年生で培った力を発揮できるように頑張ってください。

アンケート

ログイン後のホーム画面の「お知らせ」に配信されている、「アンケート」に回答しましょう。

第3回パフォーマンステスト受験

<受験前に確認・準備するもの>

ヘッドセット or マイク機能付きイヤホン

*今回は自宅受験ですので、学校からのイヤホンを選ぶことはありません。

*静かな環境であれば、ヘッドセットなしでも受験可能です。

<受験の方法>

1. 【振り返り 1/14-1/19】 第2回の評価が返却されています。今回は AI のみの評価となります。各自で自分のスピーキングを振り返って、第3回へつなげよう！

<テスト完了→パフォーマンステスト発給第3回> をクリックすると、10月に受験した、第2回パフォーマンステストの評価が見れます。

BASE in OSAKA

2. 【受験 1/20-1/26】 <テスト未解答→パフォーマンステスト発給第3回> をクリックして、流れに従って受験。

何か質問などがある場合は、1年英語科(問井・クリブ・高・藤)まで。

受験後、点検で取り返して(1/27 までに、総合英語1αの担当の先生に提出)

<1年間の英語スピーキングについての振り返り>

【確認事項】 □には完了の✓を記入

□ アンケートに回答した

□ Base in Osaka 第3回パフォーマンステストを受験した(1月 日)←受験日記入

【受験後の振り返り】

自己評価 5 4 3 2 1

Good Bad

第3回パフォーマンステストについての振り返り

1年間のスピーキングについての振り返り

スピーキング力向上に向けて取り組んできたことや挑戦に感じていることを記入

スピーキング力向上に向けて今後取り組みたいことに取り組んできたこと

1年 期 番号 名前

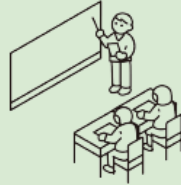
<1月パフォーマンステスト実施後の振り返りシート>
スピーキング力に焦点をいぼって、振り返りを実施。

活用事例について（小学校）

○各校の活用事例のまとめ

教室内

- ・ペアトークや会話練習前に発音練習
- ・授業冒頭で関連語句の音声確認と発話によるウォーミングアップ
- ・積極的な児童を月間MVPとして、表彰し意欲向上を図った。



家庭学習

- ・授業の都度、宿題を配信し、自主学習を促した。
- ・夏休みには、自主的に取り組む課題として、週1回10分程度の宿題を配信した。



児童の姿

- ・児童が楽しみながら英語を話す姿が増加した。
- ・家庭学習での活用により自信がつき、発話機会が拡大した。
- ・個々のレベルに応じた学習支援が可能になり、自主学習を促進することができた。

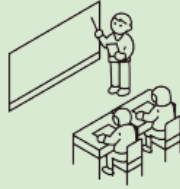
活用事例について（中学校）

○各校の活用事例のまとめ

教室内

授業冒頭 5～10分程度の **帯活動**

文法項目別例文(音読練習)



→コミュニケーションで使えるような表現を
ペア・クラス全体で共有 など

家庭

宿題の配信(長期休業中含む)

主に文法項目別例文(音読練習)



→英検2次試験の模擬練習コンテンツで
ひとりで対策を進めることもできた



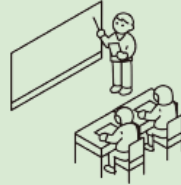
生徒の姿

- ・AI解析による即時フィードバックで **個々の課題が明確** になった。
- ・英語に対する **興味が薄い生徒も単語練習に熱心に取り組む** 姿が見られた。
- ・英文を読む際には、**音と音のつながり**を意識するようになったり、
アルファベットの一音にもこだわる様子が伺えた。

活用事例について（高等学校）

○各校の活用事例のまとめ

教室内



授業冒頭 5～10分程度の **帯活動**

文法項目別例文(音読練習)や「英検®」などの活用

→ニーズに応じて4技能をバランスよく学習

家庭



・**夏期課題**として音読問題を配信

・入試対策として、「基本練習_並び替え」問題の
学習を促した。

→英検2次試験の模擬練習コンテンツで
ひとりで対策を進めることもできた



生徒の姿

・振り返りシートで **音読の効果を実感**した生徒が見られた。

・AIの評価やフィードバックを瞬時に確認でき、**意欲的に取り組んでいる姿**が見られた。

・「英検スピーキング」の継続利用で **英語を話すハードルが下がった**。

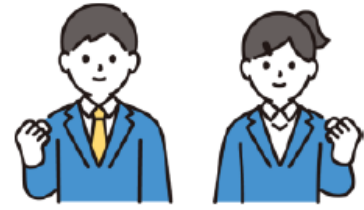
The background is a light gray gradient. It is decorated with numerous realistic water droplets of various sizes, some clustered and others isolated. In the upper center, there is a faint, circular logo or watermark that appears to contain a stylized emblem or text, though it is not clearly legible.

実証研究のまとめ

成果検証（アンケート結果より）

BASE in OSAKAの利用におけるアンケート調査結果

- ◆ モデル校：小学校4校 中学校4 高等学校3校
- ◆ パフォーマンステスト及びアンケート 年3回実施、学習ツール BASE in OSAKAを活用

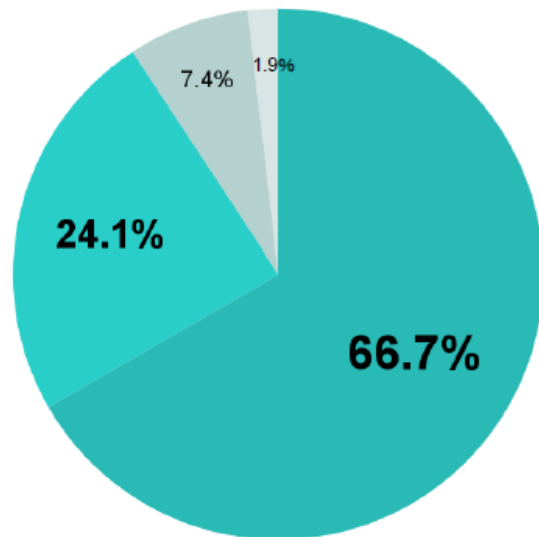


■ BASE in OSAKAを活用した英語の学習を行うことで、
英語で話す力が付いたと思いますか。（左：小学生 / 右：中高生）

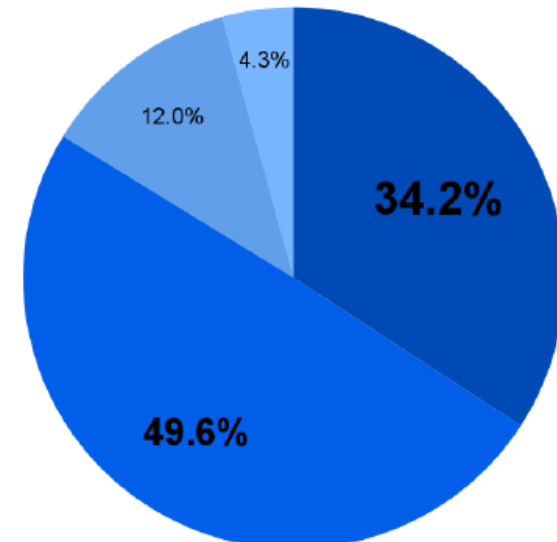
週3回以上学習した児童・生徒の**約8～9割**が
「話す」力がついたと実感！

※週3回以上「話すこと」に関する学習に取り組んでいる児童生徒のアンケート結果

● 当てはまる ● どちらかといえば、当てはまる
● どちらかといえば、当てはまらない ● 当てはまらない



● 当てはまる ● どちらかといえば、当てはまる
● どちらかといえば、当てはまらない ● 当てはまらない



成果検証 (テスト・アンケート結果より)

◆児童生徒の英語力

AI (BASE in OSAKA) を活用した
パフォーマンステストの結果

AI評価 (平均点)	検証初期 (5月)	検証終期 (1月)
小学校	22.2	28.6
中学校	35.5	36.2
高等学校	25.4	41.4

BASE in OSAKA を活用したパフォーマンステストの、検証初期と検証終期のAI評価の平均点の比較では、いずれの校種においても上昇が見られました。
※100点満点

◆教員の指導

アンケート項目

「AIの活用により児童生徒を励ます具体的な声かけが増えましたか」→研究校の80%以上の教員が「増えた」と回答
⇒AIの活用により児童生徒の個別の学習状況が把握できることなどから、より効果的な声かけにつなげていくことができたことが見て取れます。

◆児童生徒の関心・意欲

アンケート項目

「AI (BASE in OSAKA) を利用した英語でのやり取りを行ってみて、もっと英語で話せるようになりたいと思いましたか」

実施時期	第2回(10月)	第3回(1月)
肯定的回答(%)	71.1	72.1

※第1回(5月)では本項目への回答は実施無し

研究校の児童生徒向けに行ったアンケートの、「BASE in OSAKA を利用した英語でのやり取りを行ってみて、もっと英語で話せるようになりたいと思いましたか」という質問などで、肯定的回答割合が高い結果となりました。

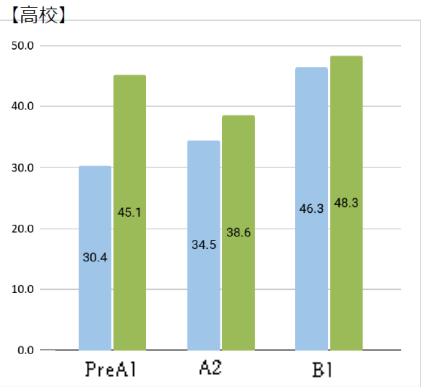
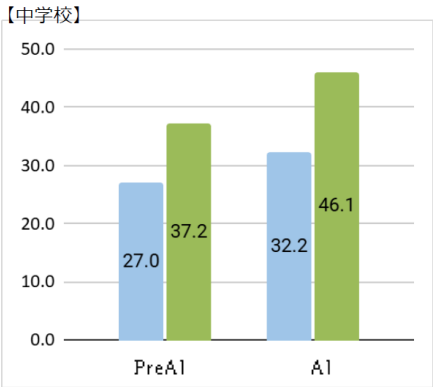
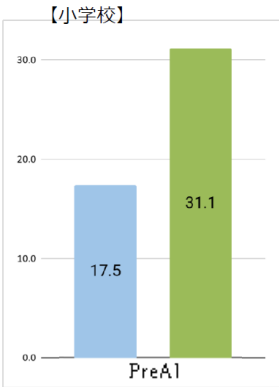
成果検証（テスト・アンケート結果より）

◆児童生徒向けアンケートとパフォーマンステストのAI評価の相関（アンケート結果とパフォーマンステストのレベル別平均点クロス集計）

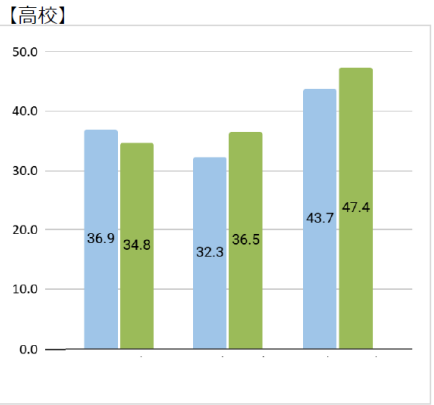
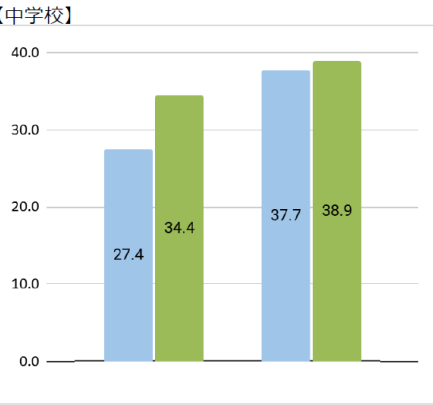
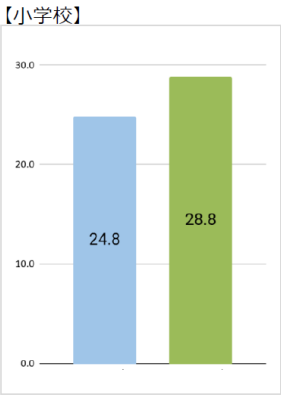
【クロス集計】テスト平均点-アンケート結果

グラフ数値は第3回 AI評価平均点

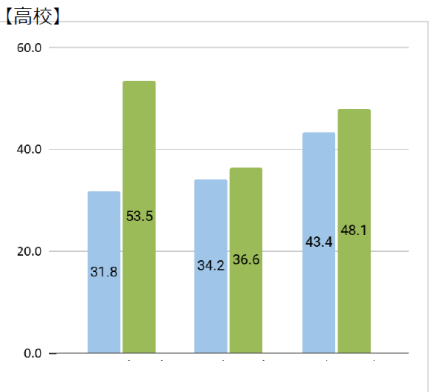
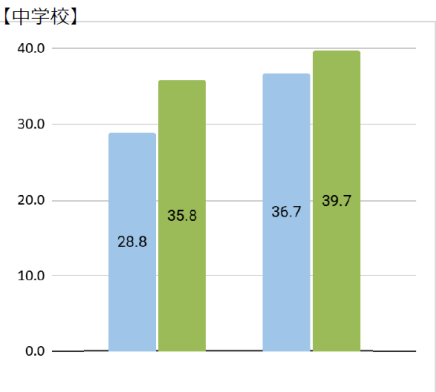
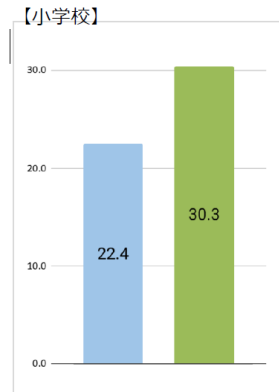
■Q BASE in OSAKAを利用した英語でのやり取りでは、どのくらい自分の考えや気持ちを話せましたか。
肯定的回答：スムーズに話せた/どちらかといえば、スムーズに話せた
否定的回答：全く話せなかった/どちらかといえば、あまり話せなかった



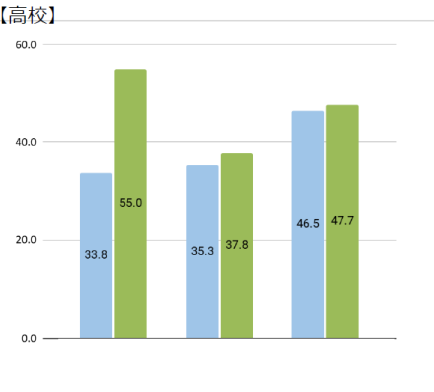
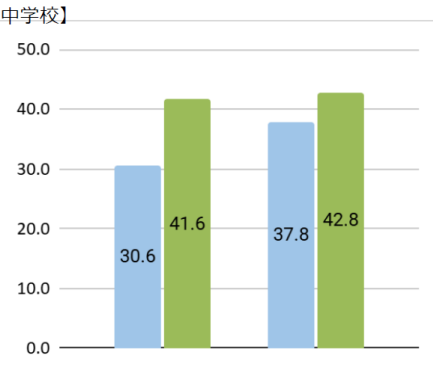
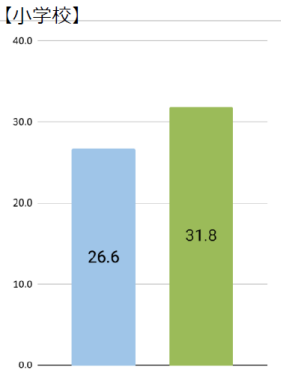
■Q BASE in OSAKAを利用した英語でのやり取りを行ってみて、もっと英語で話せるようになりたいと思いましたか。
肯定的回答：当てはまる/どちらかといえば、当てはまる
否定的回答：当てはまらない/どちらかといえば、当てはまらない



■Q BASE in OSAKAを利用した英語でのやり取りを行ってみて、実際に外国の人と話してみたいと思いましたか。
肯定的回答：当てはまる/どちらかといえば、当てはまる
否定的回答：当てはまらない/どちらかといえば、当てはまらない



■Q BASE in OSAKAを利用した英語でのやり取りを行ってみて、家庭等で英語の「話すこと」に関する学習に取り組むようになりましたか。
肯定的回答：取り組むようになった
否定的回答：取り組まなくなった/変わらない



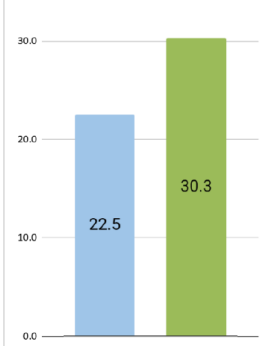
成果検証 (テスト・アンケート結果より)

◆児童生徒向けアンケートとパフォーマンステストのAI評価の相関

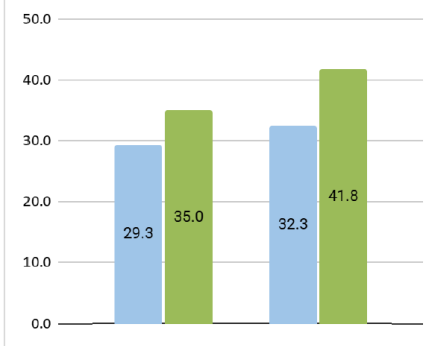
■Q BASE in OSAKAを利用した英語でのやり取りを行った後の「フィードバック」を踏まえて、何ができていて、何ができていないかが分かりましたか。

肯定的回答：当てはまる/どちらかといえば、当てはまる
否定的回答：当てはまらない/どちらかといえば、当てはまらない

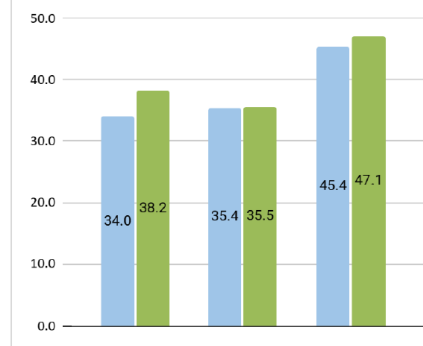
【小学校】



【中学校】



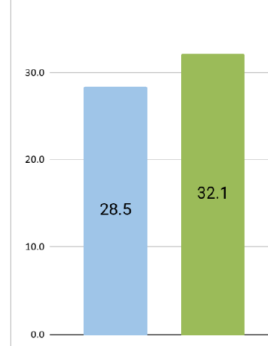
【高校】



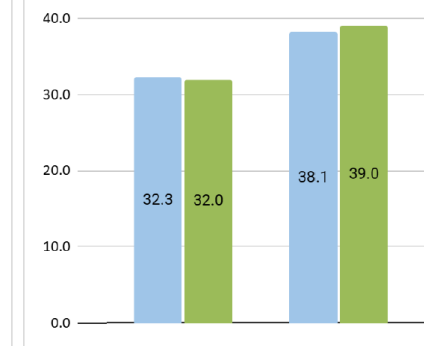
■Q BASE in OSAKAを利用した英語でのやり取りを行った後の「フィードバック」を踏まえて、実際に学習内容や学習の仕方を変えましたか。

肯定的回答：当てはまる/どちらかといえば、当てはまる
否定的回答：当てはまらない/どちらかといえば、当てはまらない

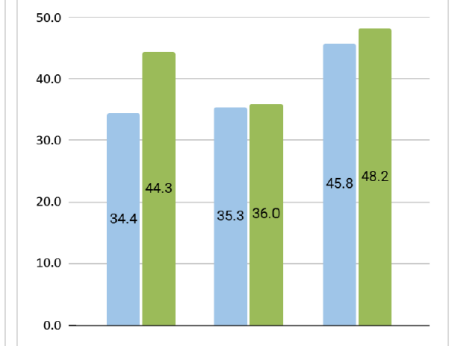
【小学校】



【中学校】



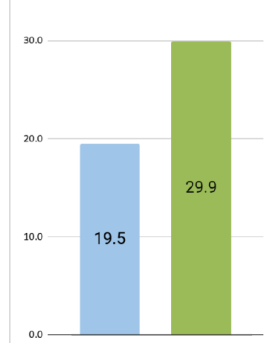
【高校】



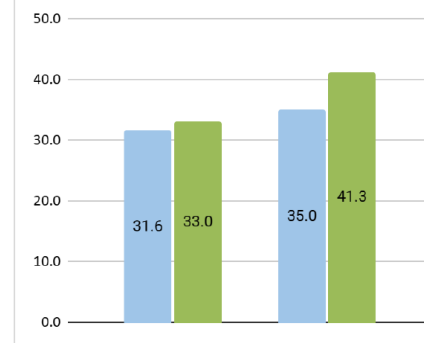
■Q BASE in OSAKAを利用した英語でのやり取りを行った後の「フィードバック」を踏まえて、英語でのやり取りにおける次の目標を考えることができましたか。

肯定的回答：当てはまる/どちらかといえば、当てはまる
否定的回答：当てはまらない/どちらかといえば、当てはまらない

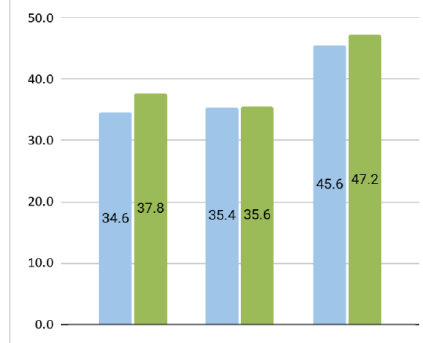
【小学校】



【中学校】



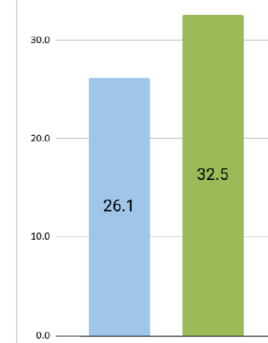
【高校】



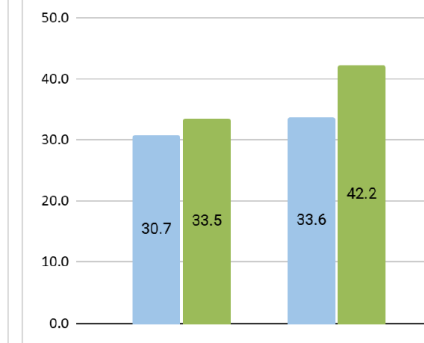
■Q BASE in OSAKAを利用した英語でのやり取りを行った後の「フィードバック」を生かした英語の学習を行うことで、英語で話す力が付いたと思いますか。

肯定的回答：当てはまる/どちらかといえば、当てはまる
否定的回答：当てはまらない/どちらかといえば、当てはまらない

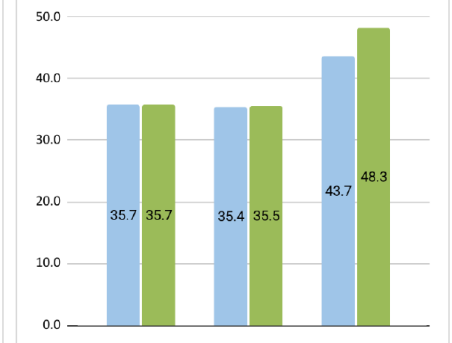
【小学校】



【中学校】



【高校】



⇒児童生徒向けアンケートの質問に対して、肯定的に回答している児童生徒については、AI (BASE in OSAKA) を活用したパフォーマンステストにおいても、AI評価の数値が高い傾向が見られました。

○成果

◇児童生徒にとって

- ・授業中での活用…実際のコミュニケーションに向けた表現の練習
- ・家庭学習での活用…家庭でのスピーキング、英検面接練習が可能

⇒AIからのフィードバックがあることにより、学習意欲が向上。

ツールをよく活用している児童生徒は、英語力向上との相関関係も。

◇教員にとって

- ・児童生徒の学習状況を個別に把握できる（AIの評価や取組み状況）
- ・課題配信による個別学習・家庭学習の充実、パフォーマンステストの一斉実施

⇒AIが教員の見取りを補助。ツールを通して、児童生徒の個別の学習状況が把握でき、学習内容に対するフィードバックや声かけを行うことができる。

○改善・検討が必要な点

◆児童生徒にとって

- ・ツールの継続的な使用に対する意欲の維持

- 活用の差による、英語力の差の拡大

- ⇒個別に応じた課題を選択する力や意欲を高める仕掛けが必要

◆教員にとって

- ・授業や学習内容とつなげた指導や評価への活かし方

- ツールにより、個別の学習状況が把握できるからこそ、それをどう活かすか

- ⇒活用の目的や場面をより明確にしていく必要（実際のコミュニケーションに活かせるように）

今後も、より効果的なAI等の活用や指導改善について検討が必要

今後の取組みについて

【デジタル技術を活用することで見いだしたい効果】

＜児童生徒＞

授業や家庭学習での活用

デジタル学習ツールを通してネイティブな発音を聞きながら発話することや、即興的なやり取りの練習

AI による自動採点機能等を活用し、自らの学習状況や英語力を把握しながら学習



日常的に英語に触れる
機会の増加

パフォーマンステスト
の質の向上

自信をもって
コミュニケーションを図ろうと
する意欲の向上

児童生徒を丁寧に
見取る時間の確保

＜教員＞

テストや評価での活用

デジタル学習ツールの AI
データを活用する
ことにより、児童生徒の
学習状況を把握



パフォーマンステストに
おいて、「知識・技能」
を AI が評価し、教員が AI の評
価を参考に児童生徒を評価



学習評価に関する
負担軽減

児童生徒の発信力の強化

指導と評価の一体化の推進

今後の取組みについて

- 習得した知識や経験を生かし、「目的・場面、状況」に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現する英語力（コミュニケーション能力）の育成に向けた取組みの充実
- 授業や家庭学習等で、AIやデジタル教材（BASE in OSAKA等）を効果的に活用した個別最適な学びの実現による言語活動の充実に向けた取組み（AIを効果的に活用した授業等のモデル構築）
- 児童生徒の英語学習における発信力（話す、書く力）の向上に必要な、日常的に英語に触れる機会の創出



・指導方法の工夫・授業改善
・AI等の効果的な活用



英語教育の
充実

